

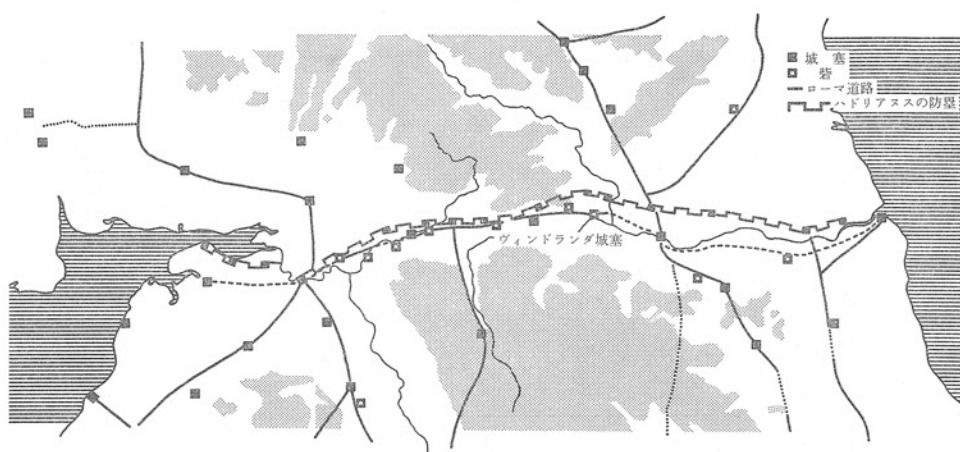
英国出土のローマ木簡

英国で最初の木簡が発見されたのは、一九七三年春、ローマ時代の遺跡ヴィンドランダにおいてであった。この英国最古の文字資料の発見者は、ロビン・バーリ。かれは、そのときの状況をつぎのように書いている。

一九七三年の初春は、暖かくて雨が少なく、三月初めには、調査員が発掘作業を再開することができた。（この地点の下層にハドリアヌス以前の堆積層があることを発見する端緒になった）排水溝を掘りなおして、拡張した。一九七二年の出土品が土壌からでたのか、溝なのか、さらには、そこには構築物があるのか、それを見定めることが重要だったからである。……………そこには、多量の木が麦わらや草と一緒にあった。木は、カシの太い材や板から壁に使った枝材や小枝まであった。移植ごてを使ってこの堆積物を掘って、わたくしは二枚の小さな薄い木片にぶつかった。油を含んだかんなくずのようにもみえた。この場所で木材加工の仕事をやっていた証拠か、ともおもえたので、トレンチのうえにいた助手

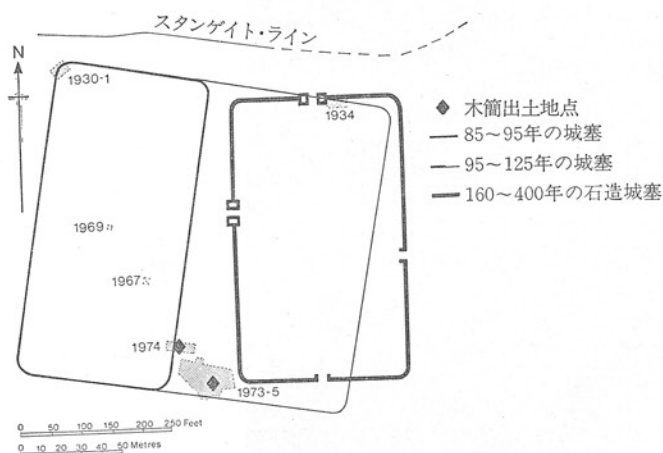


1 木簡出土地点発掘風景



2 ヴィンドランダ城塞とハドリアヌス防壁

に、どうかんがえるか、その一つを手渡した。かれはその木をよくみて、なにか妙なしみがあるといいながら、わたくしに返した。もう一度みなおして、夢をみているのにちがいない、とおもった。そのしみがインクで書いた文字にみえてきたのだ。その断片を現場小屋にもっていった、丁寧に洗ったところ、実際は二枚の木片がくっついていてあるものであることがわかった。ナイフで丁寧にをはがして、まったく信じられない気持ちで、小さな文字にじっと見入っていた。四



3 木簡出土地点

時間もたたないうちに、まだ興奮でふるえながら、わたくしたちは、ダーラムの著名な金石学者リチャード・ライト氏の応接室で、この資料をどう扱うべきか、氏の意見と判断をあおいでいた。幸いにして、氏の経験と助言とによって、詳細写真の撮影をニュールカーズル大学写真科に依頼することができた。こうして、長い調査研究がはじまった。……………

この英国最初の木簡発見の状況を伝える文章は、かつて一九六一年に平城宮跡で最初の木簡を発掘したときのことを彷彿とさせて、なつかしい。ロビン・バーリは、ダーラム大学の古典考古学講座の教授だったエリク・バーリの息子らしい。エリクは、すでに第二次大戦前に、この遺跡の調査と保存を手がけはじめている。

英国グレート・ブリテン島の中部に、ハドリアヌスの防壁がある。いうまでもなく、ローマ皇帝ハドリアヌス（在位一七―一三八年）が一三―一三五年ごろローマ帝国の辺境を防壁するために建設したもの。ヴィンドランダの遺跡は、この防壁の東西中央部に近く、その南一・五キロにある。

ハドリアヌスの防壁が構築されるまえ、その南に近い位置にあたるところに、いわゆるスタンゲイト・ラインが設けられていた。これは、国境付近に配置した城塞や砦をつなぐ道路と壕とからなる施設で、アグリコラ総督の時代（七―八四年）後の二〇年間にローマ帝国が造りあげたものだが、ヴィンドランダはこのスタンゲイト・ラインぞいに設けた歩兵隊駐屯の城塞の一つで、道路の警備と周辺のパトロールとを任務としていた。

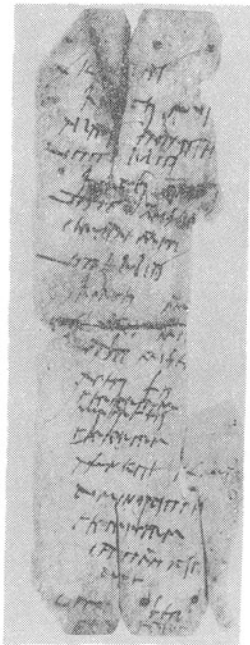
この城塞は、最初は、東西〇・八キロ、南北一・七キロほどの範囲に土塁と壕とをめぐらし、おそらく五〇〇人構成の守備隊が駐屯していたものが、九五五ごろに西へ拡張、一辺約一・七キロのほぼ

正方形に近い平面形のものとなっている。このときから、おそらく一〇〇〇人が駐屯するようになった、と木簡解読者は推測している。そのいずれの時期も、なかにあった建物は木造。その後、ハドリアヌスの防壁が構築されると、その戦略的な役割は、防壁に付設されたハウスステッズ城塞が代わって果たすようになる。ハウスステッズ城塞の位置は、北東約三キロ。このとき、一度はヴィンドランダ城塞も放棄されたらしい。しかし、その後、マルクス・アウレリウス帝（在位一六―一八〇年）治世後半になって、石造城壁と壕をめぐらし、なかに石造の建物をもつ城塞が再建される。ひきつづいて、三世紀後半にそれが拡張強化されて、東西一〇〇メートル、南北一七〇メートルほどのものとなり、四世紀末まで存続する。

木簡は、九五五ごろに西へ拡張した土塁城塞の中央南辺近くから、一九七三、七四、七五年の三か年の発掘調査で出土した。ただし、重要なもののほとんどは、最初の年の発掘で出土している。この地点では、包含層は地下四メートルほどまであり、このあたりの地下水位は深さ一・二メートルほど。木簡をはじめ、多量の有機質の遺物が保存されていたのは、このためであろう。それだけに、当然、発掘は難航をきわめる。そのため、木簡を発見してからは、発掘作業でそれを損傷することを恐れて、包含層を方二〇センチで厚さ一五センチのブロックに切りだし、そのブロックを地表面にもちあげて、そこでそれを解体発掘した、という。この地点では、包含層は

大きく五層に分かれている。最下層の第一層は八〇年代前半、表土直下の最上層は三、四世紀。木簡が出土したのは、その第二層。この層の年代の上限は、出土した貨幣から、九五五ごろ、下限は、木簡の年代から、一〇五五ごろ、と発掘者は推定している。

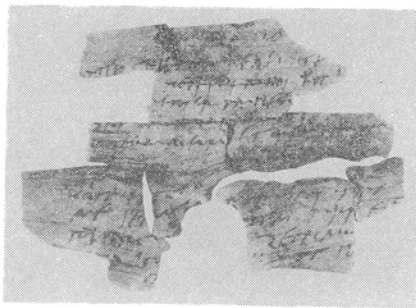
この時期、ここには革なめしの作業場があった。その建物は、木の枝を編んでその上にすき入り粘土を塗って壁とし、おなじように枝を編んだもので屋根を造っている。建物の周囲には溝がある。この建物の粘土の床のうえには、藁やハリエニシダ、ヒースを敷いており、そこに多量のごみのたぐいが溜っていた。この層が建物内外に散乱、木簡をはじめとする多量の遺物は、おもにこの層のなかに混在していた。出土したものには、まず食物残滓がある。ウシ、ヒツジ、ヤギ、ブタ、ウマ、シカ、イヌ、ウサギと鳥類の骨および多量の貝殻。ネコ一匹分の骨もあるが、これは食用ではない。また、ヘイゼルナッツの殻が数千個、このあたりにはないクルミの殻が少なかった。土器は少なく、こね鉢と土鍋がそれぞれ数個体分あった



4 帳簿木簡
長17cm

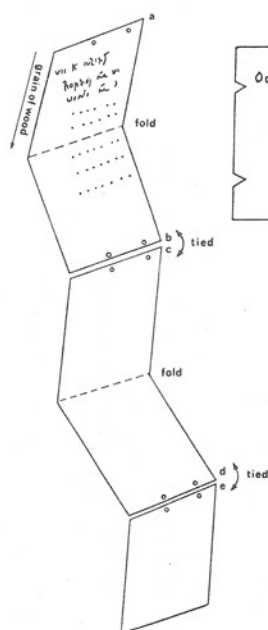
だけ。

割って食用に供したことがわかる骨のほかに、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ウマ、シカ、イヌなどの多量の頭蓋骨と脚の骨、それに蹄があった。一緒に出土した木器や鉄器には、のちの時代に革なめしに使用しているものと同じものがあるし、おびたらしい革の裁ち肩が出土している。おまけに、サシバエのさなぎが何万とあった。さらに、驚くべき事実も判明している。有機物を分析した結果によると、多量の糞尿の存在が確認できたのである。糞尿、それが皮革なめしに使用されるものであることは、ご存じのとおり。こうして、この建物のなかで行われた仕事が明確になっていった。製品として、靴、衣服、ベルト、編サンダル、巾着などの革製品がある。動物の骨のうち、



5 書簡木簡 幅10.3cm

頭蓋骨と脚の骨および蹄が多いのは、別の場所で屠殺したのち、胴部の主要部分を残して、頭と脚のついたままの革をここに運んできたからだ、と解釈できる。そのほか、興味深い遺物も多いのだが、ここは木簡の紹介が目的なのだから、この程度にしておこう。



6 書簡木簡（右）と
帳簿木簡（左）の
型式

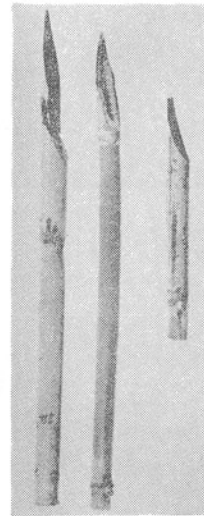
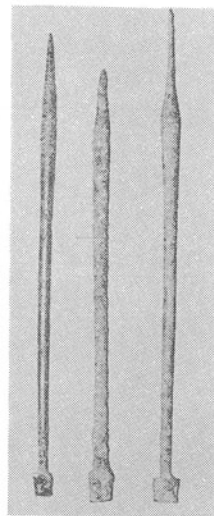
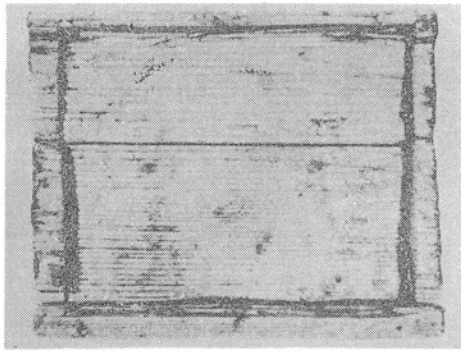
ヴィンドランダ城塞遺跡から出土し、登録された木簡は、二〇二点。そのなかには、焼け焦げのあるものもあり、ごみとして捨てられたものと判定している。その半数以上に文字がある。材料はカンバとハンノキとの辺材部分、それを長さ一六―二〇センチ、幅六―九センチ、厚さ一―二ミリの薄板にして、使用する。ときには、三ミリと厚いもの、あるいは、〇・二五ミリと極端に薄いものもある。

記載用語は、ローマ帝国の公用語であるラテン語のみ。記載内容でみると、書簡と帳簿、公式文書とがある。

書簡木簡では、この薄板を木目を横にするように置き、左右二欄に分けて、木目に平行する方向に書く。書いた後、中央やや左寄りのところに縦に刻み目をいれて、そこで二つ折りにたたむ。文面の右半分の裏面、二つ折りにしたあとでは表になる側だが、そこに宛先を書く。合わせた左辺には、刻み目をいれる。それに紐をかけて、しばったのだらう。あるいは、さらに封印をしたこともあっただらうか。この書簡木簡の型式は、書き手は違っていても、まったく同じである。文面の書式も、これまた、きわめて規格的である。第一行には、発信者名とその住所とを書く。第二行は、書き出しの挨拶部分となる。これは、多くは右に寄せて書く。書記が代筆したときには、この挨拶部分の最後の行だけを本人が書く。この書式はすべてに共通している。（第六図右）

公式文書木簡は、木目を横にして書く点では、手紙木簡と同じだが、二つ折りにしたのかどうか、左右二欄の記載にしたのかどうか、全形の半分以上の部分を残すものがないため、不明である。

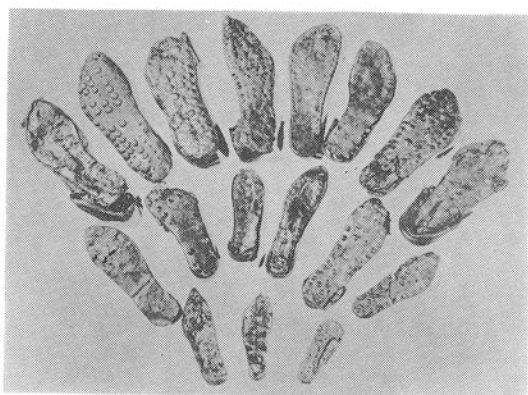
帳簿木簡の型式は、たいへんおもしろい。書簡木簡と同じような薄板を木目が縦になるように置き、木目に直行する方向に書く。それを二つ折りにし、上下に穴をあけ、次々につないでいく。蛇腹形木製帳簿というわけだ。（第六図左）



7 葦ペン（右）、尖筆（中）、
蠟板文書用筆記板（左）

筆記具は、葦の茎を削ったペン、それに煤とアラビアゴムノキの樹液ゴム、水とを混ぜ合わせて作ったインクである。これは、パピルス文書作成のときのものと同じ。書体は、一、二世紀に使われていた古ローマ筆記書体。これは、大文字で書く公式書体にたいするもの。この書体、とくにこれら木簡のそれは、読みにくいこと甚だしいが、エジプトのパピルス文書の書体に似る、という。八〇人分の異筆があるとのこと。

これまで、ローマ時代の書写材料としては、筆記板がよく知られていた。これは、板の中央を浅く彫りくぼめ、そこに蠟を流しこみ、金属製または骨製の尖筆、スティルスで刻書したもの。金属製の尖筆だから、残存しやすく、また、それに使用した板の出土品も多くあつて、これまでは、この方法がローマの書写法として最も一般的なもの、と考えられてきた。そのほかには、エジプトの諸遺跡とシリアのデウラ・エウロポス遺跡とから出土したパピルス文書がある。前者は一―三世紀のもの、後者は二世紀中ごろから三世紀中ごろのもの。そのうちの軍事関係文書は公用語のラテン語で書いてあるが、そのほかの大部分はこの地方で使用されていたギリシャ語である。このような状況のところへ、この木簡が出土したのだ。なるほど、三世紀中ごろのギリシャ人歴史家が折りたたんで使用する木簡の存在を伝えているという。しかし、ヴィンドランダ城塞からこの一群の木簡が発見されるまでは、ローマ世界においてペン書き



8 木簡とともに出土した靴

木簡が広く使用されている可能性を考えていたものはいなかった。このあたりの状況は、一九六一年の平城宮木簡発見以前のわが国の古代史学の状況とも似ている。英国でも、ヴィンドランダ城塞以後、点数はそれぞれ多くはないが、三か所の遺跡から木簡が発見されており、今後の発見がおおいに期待されている。

ヴィンドランダ城塞木簡には、政治的大事件に関する記載はほとんどない。そのあたりも、日本の木簡と似ている。公式文書木簡からは、この駐屯地における兵隊の生活がわかる。ある木簡では、三

四三人の兵隊が工場に派遣されたことがわかるし、また、土木作業で働いたり、資材調達にでかけたり、ローマ式風呂建物や病院を建てたり、壁を塗ったり、窯の焼物作業に従事したりしている兵隊がいたことも判明する。その作業内容は、ちょうどこの城塞を拡張している時期にふさわしい。

あるいは、盾と剣の製造工場で働いたものもあり、地方駐屯のローマ兵士の生活をいきいきと伝えている。

帳簿木簡は、城塞のなかにおける日用品、とくに食物の受領と支給に関するものが多い。そこにでてくる食物には、大麦、小麦、ビール、ぶどう酒、ラード、塩、香辛料などやハム、ブタ肉、ノロジカ肉、シカ肉などがある。木簡からみると、ローマ軍の食事では、肉は決して多くなかった、ということだ。

書簡木簡は、三人の人物に宛てたものがほとんどらしく、その他の書簡もふくめて、将校や兵の私信ばかり。この種の木簡の宛名から、最初この城塞にバタヴィア第八歩兵隊五〇〇人が駐屯していたが、のちに、おそらくそれも吸収したツングリア第一歩兵隊一〇〇〇人が駐屯するようになった状況がうかがえる、という。ツングリア第一歩兵隊は、別の史料によると、のちにハウスステッズ城塞の守備にあたることになる隊である。そのいずれも、現在のベルギーとオランダ地方から募兵したもの。このほか、さまざまな内容のものがあるが、近々に予定しているローマへの旅のことに触れているものもあるというのは、おもしろい。あるいは、私信も含めて、城塞の間をつなぐ通信連絡の組織の状況も推定できらしい。ちなみに、発見第一号木簡は衣服のことを書いた書簡木簡だったのと。

現在、ヴィンドランダ木簡は、大英博物館の調査実験室の専門家

によってアルコール・エーテル法で保存処理され、同館に收藏されている。

ヴィンドランダ城塞遺跡で発掘調査ずみの部分は、まだごく一部、木簡出土地点の周辺もまだ未発掘のままである。関係者は、なお多量の木簡の埋蔵を推定し、その出土を期待している。しかし、遺跡の管理や調査は、民間のヴィンドランダ財団によるもの。発掘と保存のための多額の費用の調達が困難であって、調査予定はたっていないという。

同じ木に書いた文字史料でありながら、ここまで紹介してきた英国出土のローマ木簡は、日本の木簡のことを連想させる点もあるが、あまりにも隔絶した地域と時代のものことゆえ、当然違っているところが多い。しかし、日本で木簡に親しんでいるものとして、興味をひかれたところも少なくない。たとえば、日本の木簡にはない書簡木簡の存在がある。防人には、こんなシステムはあっただろうか、いや、おそらくなかっただろう、こんど古代史の人に聞いてみよう、などと考えているうちに、『木簡研究』に紹介したら、と思いついたしだいである。興味をおもちのかたは、この紹介にも参照したつぎの書物をご覧いただきたい。

ヴィンドランダ遺跡発掘概要

Robin Birley, *Vindolanda, A Roman Frontier Post on Hadrian's Wall* (London, 1977).

ヴィンドランダ木簡概略紹介

A. K. Bowman, *The Roman Writing Tablets from Vindolanda* (London, 1983).

ヴィンドランダ木簡の詳細報告

A. K. Bowman and J. D. Thomas, *Vindolanda: the Latin Writing Tablets* (Britannia, Monograph no. 4, London, 1983).